令和５年度　山口大学教職大学院ニューズレター

学燈　Gakutou

【第 23 号】

修了生から学ぶ

８月 22 日に、教職大学院の修了生である永冨先生に、第７期生である田中院生がインタビューしました。
今回の「学燈」では、その様子をお伝えします。

修了生
永冨（ながとみ）　大樹（ひろき）先生

現役院生
田中（たなか）　詩織（しおり）

【修了生紹介】

永冨 大樹 先生

・平成 29 年山口大学教職大学院教育実践開発コース入学 第２期生　平成 31 年 修了

・実践研究題目

「主体的・対話的で深い学びにつなげるための学習課題と評価の工夫

－中学校数学科の授業実践を通して－」

・学校実習校　山口市立平川中学校

・現在　山口市立大殿中学校教諭　数学科担当

教職大学院を修了された現在、中学校の教員として働いておられる中で、教職大学院で学んで良かったと感じる点や教員生活に役に立っていると感じる点について教えてください。

教職大学院に行って良かったと思うことは２点あります。
１つ目は、週に２日間ほど学校で実習をさせてもらえたので、実際に働かれている先生方の側で仕事の様子を見たり、実際に授業実践させていただいたりして、学部生時代の教育実習では見られない部分を見ることができたことです。
また、学校実習を通して先生方とつながりができたことも大きかったです。山口市に異動になった際、学校実習でお世話になった先生方と関わる機会があり、教員間のつながりが広がったことが支えになっています。
２つ目は、教職大学院生のときに、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた振り返りの充実」を研究のテーマとしていて、実際に研究したこと（振り返りのやり方）を学校現場で生かせていることです。学校実習で実践授業を行うことで、自身の授業スタイルを１つ持った状態で学校現場に出ることができたということがすごく良かったと感じています。

教職大学院で「振り返り」についての研究をされていたとのことですが、そのときの研究と今されている授業につながりはありますか？授業を参観させて頂いて、振り返りの際に「評価プリント」を使われていると思いますが、当時の研究内容を踏まえて作られたものですか？

大学院での研究を生かして作ったのが今使っている評価プリントです。数学の授業において教えたことを理解してほしいのはもちろん、さらに自分でできるまでになってほしいと思っています。だから、評価プリントにはその日の授業で取り扱った問題と似たような問題を載せて、生徒自身が授業の内容を理解できたかどうか分かるように工夫しています。

「できた！」という実感を持ってまた次の授業につなげてほしいというのが、評価プリントを使用している一番の理由かなと思います。

当時の学校経営コースの現職教員や、学校実習でお世話になった先生に今でもお会いすることはありますか？

学校経営コースの現職教員とは、実際に現場で働き出してから研修などの際にお会いすることがあります。お会いした際には、お話ししていますね。

学校実習でお世話になった先生は、近くの学校で勤務されていたり、部活動の練習試合をお願いしたりすることがあります。このような関わりが今でも続いていることは非常に嬉しいです。

インタビューを引き受けていただき、ありがとうございました！
私たち、教育実践開発コースの後輩院生にメッセージをお願いします！

教科の専門性を高めたり、学級経営について学んだりするのはもちろん、それに加えて現場の先生方とつながりを作ることができる大切な２年間です。

教職大学院の２年間というのは、教員になるための準備期間ではなくて教員になってからどうするか、どうしたらよいのかを考える時間です。

そのことを意識しながら過ごしてほしいと思います。

＜インタビューを終えて：担当グループより＞

紙面の関係で、２人のすべてのお話を載せることができないのは残念ですが、大殿中学校で同じ数学科の教員として、教職大学院の先輩・後輩として、とても良い関係を築いていることを感じることができました。

今回のお話の中で「つながり」という言葉が何度も出てきました。永冨先生ご自身も教職大学院で築いた人とのつながりや、当時の自身の研究と現在とのつながりを大切にされていることが伝わりました。

教職大学院での学び：学びをつかみ取ること（学校経営コース）

ＶＵＣＡの時代で満足のいく人生を過ごしていくためには、ウェルビーイングの実現に向けて、自分自身をナビゲートするよう学ぶことが必要です。「実現したい未来」を実現していくための学びとは、自分で問いを立て課題を明確にし、解決に必要な「変化」を実現するために行動に移すことです。

「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力」である「エージェンシー」。この力を児童・生徒が獲得できるようにするためには、教師自身が「エージェンシー」を形作ることが前提となります。教員が、その職責を自覚して「実現したい未来の教育」実現することを目指して学びをつかみ取れるよう講義に臨んでいます。講義内では、演習、ディスカッション、インターンシップ、外部講師を招聘しての講話等の設定があります。

外部講師を招聘した授業を紹介します。７月 18 日に学校経営コース２年生の「学校経営と組織開発」の講義の一環として、講師に山口市教育委員会から藤本孝治先生をお招きし、「リーダーシップとマネジメント力」というテーマのもと、これまでの経験や研究を基に講義をしていただきました。学級担任だけでなく、教育行政や兵庫教育大学での勤務など、多様な立場を経験されています。働く環境は変わっても、絶えず「自分ならどうする」と責任をもって行動する視点が成果へと繋がることを教わりました。

事前に講義の開催要項を県内の小中学校にご案内したところ、37 名の方に参観していただきました。教職大学院性も高度な専門性獲得へのモチベーションを高めています。

今後も、こうした講義のご案内を情報発信していきますので、「学びをつかみ取る」積極的なご参加をお待ちしております。

教職大学院での学び：スペシャル授業（教育実践開発コース）

「学校危機管理、リスクマネジメントの理論と実践」の講師として、防府市立松崎小学校の秋川茂校長にお越しいただき、学校危機管理の必要性について事例を基に講義していただきました。児童生徒への指導や教職員の研修、家庭・地域社会との連携、教育行政や関係機関との連携についての実際やその意義と課題を踏まえ、学校の実効的計画や組織運営の在り方を考えることができました。

受講した院生は、事前に実習校、または原籍校等で危機管理マニュアルに目を通し、現状と課題を分析して臨み学校現場の対応と比較しながら講義を進めていきました。

危機対応演習では、実際の事例を基に教員として適切な対応について協議しました。院生は、学校危機管理において大切な言葉である「最悪を想定し、最善を尽くす」を意識しながら、それぞれの事例におけるリスクマネジメント、クライシスマネジメントを考え、発表し合いました。学校危機管理において「課題に対して一人で抱え込むのではなく、周りの教員に相談すること」を演習の中に取り入れ、院生は課題に対して近くの院生と話し合いながら解決方法を考えました。

この講義を通して、学校危機管理について学びを深める、院生自身が現場でできることをイメージすることができました。特に、教育実践開発コースの院生は、現場での経験が浅く、学校危機管理において、自分に何ができるのかを考えることは難しいため、講師の先生が経験された事例や、日本国内の事例を通して、学校危機における研修の実際を知ることができました。

自分たちができることを考え、学校現場で求められている資質・能力を身に付けることができた貴重な研修になりました。

代表 FD 主催自主勉強会

自主勉強会とは、院生の「異なるコース・学年の院生との交流を通して、幅広い意見や思いを知り、学びを深めたい！」「日ごろの授業や実習の中で得た疑問を共有し、多くの意見を聞いてみたい！」という思いから、3 コースから有志の院生が集まり、学びあう活動です。

院生が主体的にテーマを決め、ディスカッションを中心とした意見交換を行っています。４月が「人間関係づくり・授業づくり」、６月は「授業における工夫の紹介」、７月は「生徒指導対応例から学ぶ」でした。自主勉強会をきっかけに、コースや学年を越えた院生の交流が増えています。

Q：自主勉強会を開催した意図や目的を教えてください。

A：まず、自分が研修主任になったつもりで、現職教員の前で研修を企画・運営してみたいという思いがあったからです。でも、一番の理由は、大学院の組織づくりをしたかったからです。この勉強会が、コース・学年間を超えた繋がりの起点となればと思い企画しました。

（教職実践開発コース２年　田出 有人）

現職、ストマスが、教育に対する熱い思いを語り合い、時に談笑し、学び合いながら関係を深めることができる有意義な時間です。

楽しく参加しています。このような会の企画運営を学び、院生みんなが研修のリーダーとフォロアーを経験できる仕組みがありがたいです。

「現職教員のココがすごいと思った！」　協働的な学びの成果

教職大学院で、ストマスと現職教員は、主に講義を通して「理論と実践の往還」を実現するため議論を行っています。その他に、「ペアリング」と呼ばれる自主的な学習活動において、ストマスは現職教員から生徒指導対応や学級通信の作り方等、学級経営上の具体について学んでいます。

一方、現職教員は人材育成の視点から若手教員に効果的に教えるスキルを高めています。つまり、ストマスと現職教員は協働的な学びを通して常に刺激を受けています。

この度、「現職教員のすごいところ・尊敬するところは何か」との質問を 20 名のストマスにアンケートをしてみました。一部、回答を紹介いたします。

□教育現場における今日的な課題の解決や、学校運営の改善に取り組む現職教員の姿は、私たちの良きモデルとなっています。マネジメントリーダーとして、高い目標を掲げて行動する姿に学んでいます。

□教育のプロとして、私たちが即戦力として活躍できる実践力を身に付けられるよう、アイデアや意見を尊重しつつ適切な助言をいただけます。力強いサポートで、成長ができる環境を整えてくださいます。

他のストマスの回答にも「ポジティブに捉えて行動する」「相談を真摯に聞く」につながるキーワードが見られました。ストマスは、現職教員との協働的な学びを通して未来の教員像をイメージするとともに教職への期待や憧れを一層強くすることができました。

カフェ 21 オープン
～つながりから生まれる新たな山口県教育を求めて～

「教職大学院や教育の魅力を、もっとたくさんの人と立場関係なく話したい。未来を担う教員の卵である教育学部生とのつながりをつくることで、これからの山口県教育をもっと発展させたい。」

このような想いから、9月 21 日（木）に教職大学院生主催の「カフェ２１」をオープンしました。大学教授９名、教職大学院生 18 名、教育学部生 13 名の計 40 名が参加し、小学校グループ、中学校グループ、高等学校グループごとに白熱したお話が展開されました。

参加者の声を届けます！

教育現場は、喜びや感動もたくさんありますが、何よりその土台は教師の人間関係がそれを支えています。新たな出会いを学生主体で創り、楽しむ様子にこそ価値があると感じました。

教職を志す学部生と関わり、また院生との関わりなど、人間関係の広がりを味わうことができました。大学の先生方のように、若い力を信じて温かく支える先輩教員でありたいと思いました。

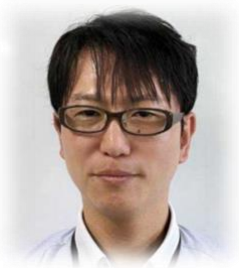
山口県教育の実態や、教職大学院の学びを全く知らなかったので、良い機会でした。教職大学院に進むという道も見え、視野が広がりました。参加して本当によかったと思いました。

「ちゃぶ台次世代コーホート」をカフェ21で紹介したことで、今回集った参加者が再会できる機会を創出し、“つながり”を演出する仕掛けがあったことが素晴らしかったです。

～カフェ 21 の軌跡と想い～

これまで教職大学院では、「自主勉強会」や「ランチミーティング」、「ペアリング活動」といったコース、校種、年代の枠を超えた自主的な学び合いを行ってきました。

こうした学びに加え、「教育学部生を和(あ)えたら、さらなる学び合いやアイデアが生まれそうできっと面白いよね？」と、現職院生とストレートマスターとの何気ない会話から生まれたのが「カフェ 21」でした。参加者からは楽しそうな表情や雰囲気が漂い、異なる感性がじわじわと和(あ)えられていく様でした。



学校経営コース２年
平田 悦也

「学部長（総務会）平日ほぼほぼ毎日日誌」
https://www.yamaguchi-u.ac.jp/edu/ryo-everyday/index.html

ほぼほぼ毎日日誌
二次元コード

教育学部長　鷹岡先生の日誌にも掲載されています！